

# 地元の要望を聞き出し きずなを深めた2時間



意見交換する市民と大学関係者。本音を語り合い、互いの距離を縮めた。

シナリオ無し。飛び出す意見は予測不能。市民と大学がざっくばらん語り合う。そんな意見交換会(タウン・ミーティング)が能登半島の中間に位置する羽咋市で開かれた。冷たい雨が降る12月1日の夜、会場となった市内の公共施設「コスモアイル羽咋」は120人を超える来場者が集まり、会場は熱気に包まれた。

社会貢献室 山本秀樹

大学の使命を語るうえで「地域貢献」が注目を集めている。大学間競争が激化し、「地域に根ざした大学でなければ生き残れない」と叫ばれるなか、「地域貢献」の重要性が認識されたからだ。平成14年、金沢大学は地域貢献推進室(現社会貢献室)を設置。子育て支援や里山自然学校など、本格的な地域貢献事業に取り組んだ。

羽咋市で開催された「タウン・ミーティング」も同年から続く事業の一つだ。「タウン・ミーティング」は、地域の要望を大学運営に生かすことや地域との組織的な連携を推進することを狙いとし、これまで石川県内5カ所で開催してきた。羽咋市は6カ所目となる。

当日は午後7時から、橋本哲哉副学長と橋中義憲羽咋市長のあいさつで幕を開けた。

## 観光から農業まで幅広く 研究に発展する要望も

「千里浜海岸を浸食から守るにはどうすれば良いのか」と質問したのは、「羽咋ブランドの会」の富山一夫さん。市内の観光スポットとして有名な千里浜海岸の砂浜が、年々、

狭くなっているという。これに対して、海岸海洋工学の石田啓教授が、「人工の構造物を設置して、浸食を防がなければならない状況にまでできている」と答えた。これまでは20年以上にわたって人工物を使わず、近くの港の砂を千里浜に戻す活動を続けてきた。それでも浸食は続き、このままでは砂浜がなくなる可能性も否定できない。

クワイ生産組合の松本政文さんは、「クワイの薬効を調査してほしい」と要望した。クワイは、正月のおせち料理にも使われる伝統野菜の一つで、市内では昭和55年ごろから栽培を始めた。現在は、高齢化が進み生産が激しくなってきたが、同組合は薬効を見つけ、特産物としてその生産を守っていきたいと考えている。医学や薬学の教員は不在だったが、平野武嗣・産学官連携コーディネーターが、キノコの薬効などに詳しい薬学部教授を紹介することを約束した。

このほかにも、「新しい特産品の開発に協力してほしい」、「妙成寺を国宝にするための助言を」などの意見や質問が相次いだ。大学の全教員が揃っていないため、即答できない質問もあり、それらは「宿題」とし

て大学へ持ち帰ることにした。「水田の衛星写真を解析して米の品質を評価する技術を白米に応用することはできないか」との要望は、具体的な共同研究に繋がろうとしている。

## 人々と直接向き合い 親密な関係を構築

終了後は、「羽咋市の良さを再認識することができた」と笑みをこぼす人もいれば、「時間が足りなかった」とちよっぴり残念がる人もいた。確かに、2時間という短い時間では、深い意見交換ができたとは言えない。しかし、互いの顔を初めて知り、本音で話し合うことができたこと自体に大きな意味がある。

地域の要望を教育・研究活動に生かしたい大学と、大学の知的資源を活用して街の活性化に繋げたい地域とが連携することで、地域活性化への大きな力が生まれるに違いない。連携のきっかけを得たい、これからの連携活動の行方に期待したい。

「金沢大学タウン・ミーティング」は、石川県内各地で実施します。開催の要望は、社会貢献室へ。